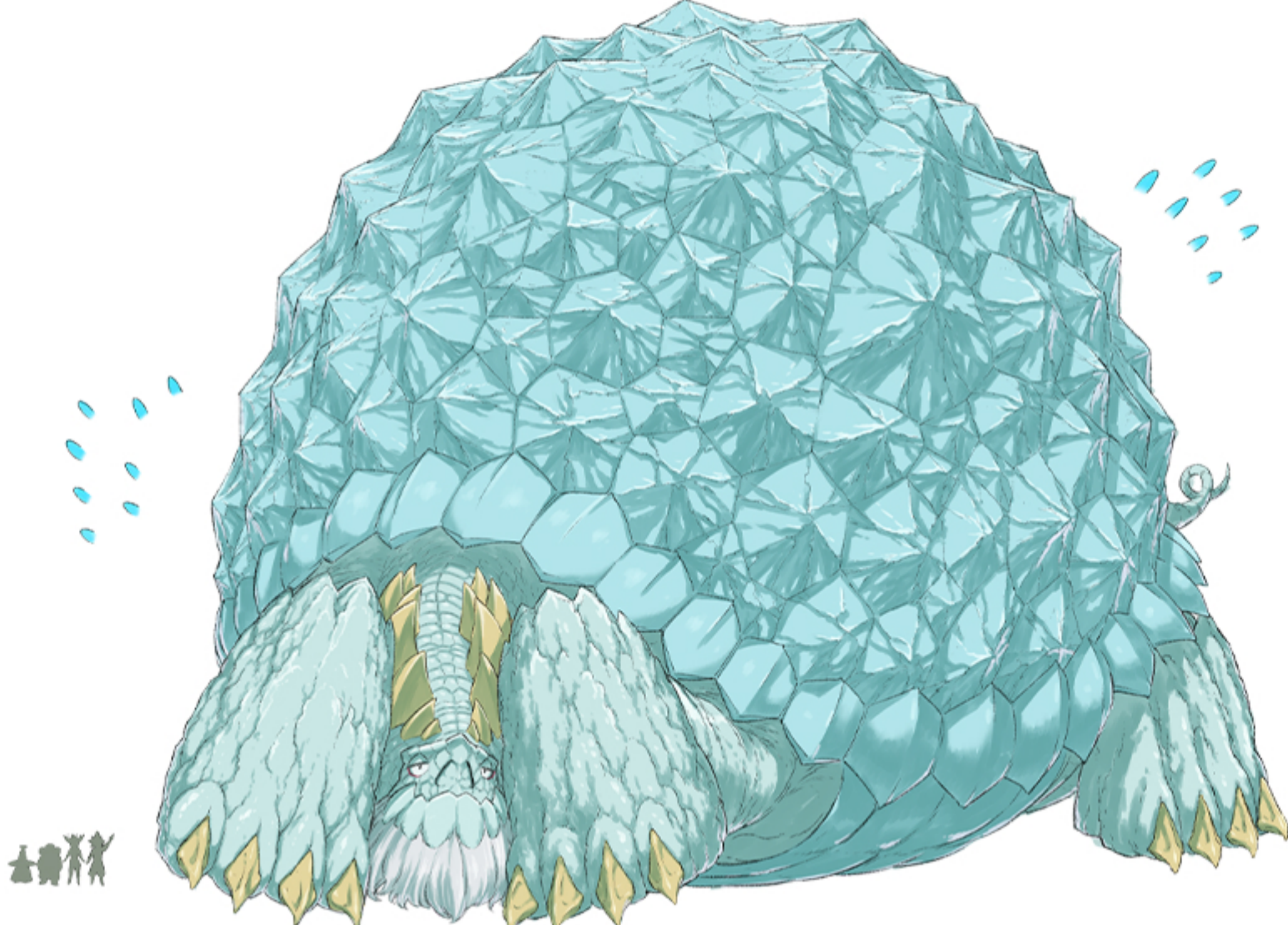


8.下剋上

太古龍ノ口の引きこもりを解くのは根気のいる作業だった。

かつて、カメラマンのサーニャとミラナのお父さんに聞いた、動物取材の心構えに従い、近くにテントを張ってたまに顔を出して様子を伺い、近くにも無害な存在であることを粘り強く理解してもらうという作戦で数日。カジュアルトークで趣味などを聞き出し、(ボエムなど好きらしかったが結局恥ずかしがって見せてもらえなかった) マクールにもらった紹介状を見せてはあの怒鳴り声を思い出させやっぱり引き籠り、手持ちの食糧が少なくなってきてランガーオ村まで買出しに戻ったりもした。旅路、急いでたのに…!



しかし、少しずつ様子をうかがっていくにつれ、単に人見知りとか恥ずかしがりやというだけでなく、彼が畏れているものがわかってきた。悪夢龍レムナスの動向である。

数百年前に見失って以来、レンダーシアで生まれかけていた新たな太古龍、レムノンの消息はノロもそれとなく探っていた。ランガーオの峻厳な山々に深く根付いて、大地の奥深くに流れる魔力と繋がっていると、アストルティアで起こる様々なことが分かるらしい。そして11年ほど前、子供の頃のソウラが嵐のドラゴンたちに遭遇していた時に、ノロもウェナ諸島の方にレムノンと似た気配を感じてはいたのだが、普通にビビってそれ以上確認していなかったという。(4人全員でツッコミを入れた)

だが、ここ数か月ほど、見失った気配の片割れ、レムナスの<仮面>の活動はあからさまになってきているのだという。特に先日、カルデア山道の一件で献義体に取り憑いて暴れた時以降は、しばしば巨大な魔力の脈動を感じるらしい。おそらく、その時と同じような憑依の実験を今でも行っている…。

アビーは、不完全な状態のレムナスの<仮面>に必要な体を与え、完全な龍として解き放つのだと言っていた。そう、現在のレムナスの<仮面>には体がないのだ。他の太古龍たちは確かな肉体を持ち、それを<仮面>が預かっているという状態のはずなのに…。

そもそも、レムナスの<仮面>の精神状態は異常である。(他の仮面たちは…まあ、うん) 恨みがましく、攻撃的で、不安定で、おおよそ太古龍の強大な力を任せられるようなものではない。なぜそのような性質になったかということについて、アズリアとノロの意見は一致していた。かつて大魔王マデサゴラによって分離させられた時に、偏った夢の性質、不安や絶望を与えられたからである。その性質を、<仮面>までも引き継いでいる。その仮面が、主である<原質>のものではない、新しい体を欲している…?

レムナスの<仮面>は、<原質>に対する下剋上を企んでいるのではないのか…?

献義体となったネフェルニシアの強みは、外部の干渉を受けない純粋な霊体である本体から、シームレスに物質である包帯を生み出し続け、実質一方的に相手を攻撃し続けられるというタフさである。しかも彼女の外殻を構成する包帯は、束ねれば凄まじい臂力を発揮する四肢となり、ほどけば精密に動作する鞭にもナイフにもなった。そのうえ必要に応じて様々な呪文を使いこなす難敵なのであった。

だが、それと対峙するユルール一行も、今や何度も世界の危機を救ってきた、歴戦の英雄たちである。アマセは数度の対戦から、霊体から直接つながっている包帯部分に攻略の糸口があるとらんで、ディオニシアとともに、ネフェルニシアが操る魔法の術式を研究した。包帯を通じて本体にクラッキングし、純粋で物理的に干渉できない霊体に不純物を混ぜこむことによって、通常のゴーストと同程度には、物理的な攻撃が通じるようにしたのだ。

そうなってしまうと、いかに苛烈な攻撃をしようとも、ユルールの進撃を止められるものではない。包帯や呪文の嵐を、うち払い、躲し、突き破ってネフェルニシアのもとにたどり着いた。ユルールに腕を掴まれながらも、ネフェルニシアはじたばたともがいた。もう時間がない!この男だけは道連れにしないといけないのだ。そうしないと、自分と姉にこんな残酷な仕打ちをした故郷の一族を、こいつは救ってしまう…!泣きながらもがく彼女に、ユルールは、もう全部決着をつけてきたよ、と語りかけた。彼はすでに、かつての時空をめぐる冒険の際に知り合った古代エテーネ王国の人々の力を借りて、姉妹の故郷となる時代への行き方を調べ、そこに現れた滅びの原因である魔獣を、倒してきたというのだ。



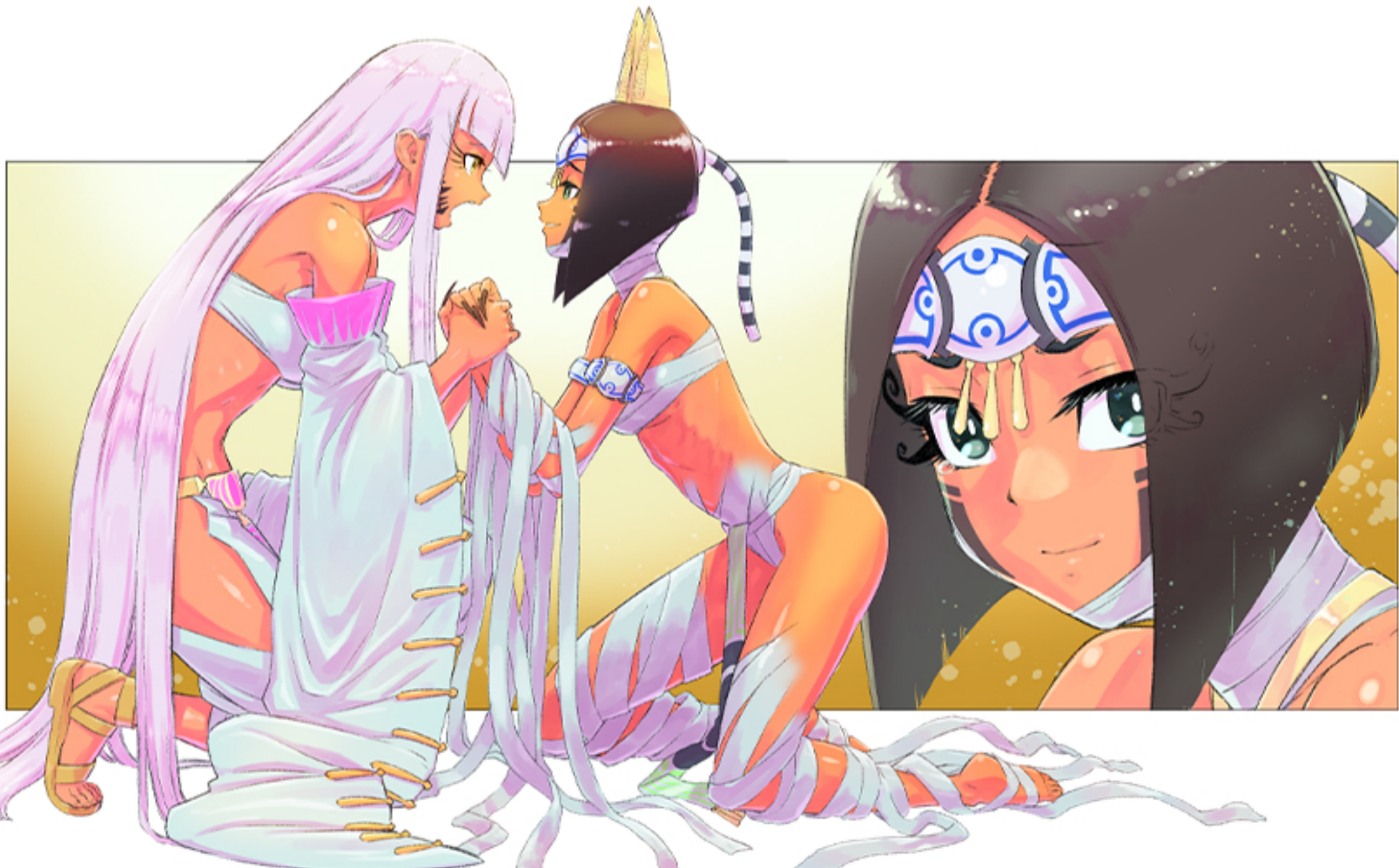
姉妹の一族を襲ったのは、かつて古代エテーネ王宮を破壊した、異形獣ヘルゲゴグの、特殊に変異した実験体だった。終焉の繭とともに時空を超えて活動するための個体を生み出すための実験の過程で生み出され、保管されていたものが、王立アルケミア崩壊の際に解放され、エテーネの血を引くものの抹殺のために、時さえも超えて、その力を強く発現させている者たちのもとに現れたのだ。

ヘルゲゴグたちはもとより、エテーネの民が持つ力を吸い取る能力を備えており、それを受け継ぐ墓守の一族はたやすく力を奪われて、まともに抵抗ができなかった。しかし王族として莫大な時渡りの力を持っているユルールがその吸収能力にも耐えられることは、かつての冒険で確認済みであり、実際何体もの様々な異形獣を倒してきた。攻略は難しくなかったが、その前に彼は一族に注文を付けた。

墓守の使命を終わらせ、伝えてきた技も忘れてほしい。そしてディオニシア、ネフェルニシア姉妹のような、過酷な使命を誰かに背負わせるようなことが、今後起こらないようにしてほしいというものである。何百年も続けてきた生き方を変えるということはとても難しい。彼らは渋ったが、ユルールは自分の王族としての立場や、滅びたと思われたエテーネ王国が、国ごと未来へと転移することによって、実は救われていたのだということまで持ち出して、(ついでに、今守っている墓のファラオたちも、結果的にその伝承だけが残って、それがマデサゴラによる創世事業によって、偽りのレンダーシアに再現されていることまで伝えて) 彼らを何とか納得させた。そして、現れた変異異形獣たちを倒して、一族を救ったのである。

結果、現在のアラハギーロ地域に、彼らの痕跡は残されていないので、彼らは約束を実行したのではある。しかし結局、姉妹への謝罪や、反省の言葉までは引き出せなかった。一族の使命感はそれほどまでに歪んで、凝り固まってしまっていたのだ。ユルールは苦い思いでそのことをネフェルニシアに謝ったが、彼女は首を振り、泣き笑いで、自分たちを一族丸ごと、呪わしい因業から解き放ってくれたことに礼を言った。そして、ようやく触れ合えるようになったその手で姉の手を取り、姉様はどうか、何物にも生き方や死に方を縛られない未来で、どうか幸せを…と伝え、ちょっとだけ悔しそうな、羨ましそうなジト目でユルールの方を見て…

霧のようにその姿がぼやけて、消えてしまった。



その奥で、おや?龍の血が、抜かれ…と言いかけたゾフィーヌも、そのままどたりと倒れ込み、動かなくなった。そしてその体は、急速に腐敗して、ぐずぐずと真っ黒な土ようになって崩れていった。彼の肉体は、魔法で無理やり腐敗を抑えた死肉で構成されていたのであった。

龍の血は、献義体の中で熟した。収穫が始まったのであった。そして、レムナスの<仮面>にとつての、十分な仕事を果たした魔博士たちは…